

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月25日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20401016

研究課題名（和文）大英博物館蔵日本版画・浮世絵の総合カタログニング

研究課題名（英文）Comprehensive Cataloging on Japanese Woodblock Prints
in the British Museum

研究代表者

赤間 亮（AKAMA RYO）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：70212412

研究成果の概要（和文）：全8回の現地調査により大英博物館所蔵のすべての浮世絵・画帖と関連する所蔵版本400点について、精細な画質のデジタル画像を取得することにより、網羅的にカタログニングし、全貌を把握することができた。常にレベルの高い専門学芸員が継続的に収集を続けてきた博物館であり、著名な絵師、初期作品などの知られていた名品以外にも稀少絵師、特殊フォーマットが網羅的に収集されているなど、高い質を有することが判明した。

研究成果の概要（英文）：I completed the survey and digitization with high resolution camera for all Japanese prints, Ukiyo-e albums and related illustrated books (400 title) in the British Museum. By using the digital image, I have catalogued them comprehensively, grasped the full view of the collection. Because of employing admirable curator for each period, they collected masterpiece of famous artist, early work of Ukiyo-e. Not only the masterpiece, but they have also collected the rear prints and special format which has scarcity value with full cautious.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2009年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2010年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2011年度	2,600,000	780,000	3,380,000
総計	10,500,000	3,150,000	13,650,000

研究分野：美術史・近世文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：国際研究者交流、国際情報交換、イギリス、浮世絵画帖、

ARTHURE R. MILLER Collection、リンク型DB、メタデータ、専門的収集

1. 研究開始当初の背景

浮世絵は、海外に流出した資料が多く、海外で盛んに行われてきたため、海外の研究が日本に先行していた。日本での学術的研究は大正期からスタートしているが、本格的に学術分野として定着するのは、江戸時代文化の他領域とおなじく、戦後になってからである。

しかし、これまでは浮世絵研究は、科学的な研究ではなく、趣味の領域と言われてもしたがなかった。20年ほど前から、科学的調査方法を使った所在調査が進みはじめ、研究発表・研究論文においても網羅的な調査を経た上での成果が現れ始めた。さらに化学系のツ

ールを使った絵の具の分析など、まさに“科学的な”レベルの研究も生れている。しかし、研究対象はなお浮世絵の前半期に偏っており、その残存数の大部分を占めるとされる寛政から明治期の研究は、全く不十分である。

また、日本においては、特に、美術分野の研究者だけが研究対象としてきた。しかし、ここ 20 年ほどの間に、こうした初期段階から、美術以外のジャンルで浮世絵を取上げる機会も格段に増加した。

こうした研究の背景となったのが、デジタル画像での WEB 公開と共有化である。これまで、所蔵機関の地理的な条件や脆弱な絵具を理由にした現物閲覧の困難さにより閉ざされていたものが、デジタル複製技術により、

複製ではあるもの だれもが研究対象とできる環境が用意され始めたのである。研究代表者は、こうしたデジタル公開・共有化路線を推進してきたもので、国内では、すでに早稲田大学演劇博物館、都立中央図書館、立命館大学アート・リサーチセンター、などの大規模所蔵機関の DB 公開を実現している。ヴィクトリア&アルバート博物館プロジェクトは、現在の環境をさらに大きく開花させるものであった。

英国大英博物館は、いうまでもなく世界でも最大規模の博物館である。日本部門では、工芸品、絵画を中心として大量の収蔵品を誇り、広い日本展示室と世界トップクラスの学芸員がおり、日本研究の一つの拠点として、世界中からの来訪者がある。収蔵品のなかでも浮世絵は、肉筆も含め現在約 25,000 枚を越えたと予想されている。当該コレクションは、大英博物館が現在まで長期に亘って収集・寄贈を受けてきたもので、日本の文化・歴史・民俗をビジュアルな形で知る最も有効な材料として、現在も大英博物館が収集対象として最も力を入れている分野である。これまで、学術誌の個別論文による紹介の他、『浮世絵聚花』(小学館)『秘蔵浮世絵大観』(講談社)などの浮世絵全集では、必ず冒頭の巻に置かれて 2 冊から 3 冊の配分でいわゆる美術的な観点からの名品が紹介されてきた。しかしながら、上記の通り、所蔵品は膨大な数に上り、常駐している学芸員にもその全貌はつかめないままになっている。

研究代表者は、2004 年から 2007 年度まで基盤研究 B により、やはり英国のヴィクトリア&アルバート博物館(ならびに分蔵資料であ

るスコットランド国立博物館)の所蔵浮世絵約 40,000 点を対象に、悉皆調査を実施し、デジタル画像化ならびに、全目録を完成した。ヴィクトリア&アルバート博物館日本部門主任学芸員との連携により、現在、英語カタログも作成中である。この研究の成果を背景に、2007 年度には、日本の 5 箇所を巡回する当該館所蔵名品展の開催が実現している。また、2005 年度には大英博物館と大阪歴史博物館・早稲田大学演劇博物館で開催された浮世絵資料を中心とする「大阪歌舞伎」展において、研究代表者は、大英博物館側チームの一人として調査・準備作業に参加したが、2002 年から 1 年間、研究代表者の学外研究を利用して、この展覧会に関係する資料についてのデジタルアーカイブを実施し、大英博物館学芸員ティモシー・クラーク氏からの高い評価を得ている。今回の調査研究は、上述の実績を踏まえてスタートするもので、クラーク氏強い要請によるものでもあることも加えておく。

2. 研究の目的

大英博物館所蔵浮世絵は、名品揃いで、しかも点数が多いのが特色である。本研究では、この大英博物館所蔵浮世絵作品の詳細なカタログニングを行ない、所蔵品の全貌をリスト化して、画像付きで WEB 上で公開できるようにするものである。これは単に、1 所蔵機関の 1 分野の資料の「目録作成」とは、全く違った意味がある。長きに亘り浮世絵の“名品”を収集し、世界の浮世絵評価の基準を作ってきた大英博物館の所蔵資料を、カタログニングと同時に画像も含めて全世界に公開することは、いわば浮世絵研究の基準を提示することになるのであり、研究の質を大幅にアップすることに繋がるのである。前回のヴィクトリア&アルバート博物館プロジェクトが、幕末の資料を量的に精査するという特徴があったが、大英博物館の場合は、浮世絵史上の全時代の質の高い資料・作品であり、これらを研究上で共有化するというこの意味は、カタログニングそのものが、浮世絵事典を構築するのと同じ役割を果たすと予想している。

さらに言えば、これまで美術研究の分野では、ほとんど取上げてこなかったジャンル、たとえば、役者絵、風俗画、風刺画、歴史画などの分野について、それぞれ重厚な資料群

を確保できる。役者絵については、初期から中期にかけて、いまだ知られていなかった作品が数多く発見される可能性が高く、役者絵資料や役者絵研究の空白期間を埋めていくことができる。

浮世絵の原資料の所有数は、海外の方が日本国内を上回っていると言われている。著名なコレクターはいうまでもなく、大規模所有の美術館・博物館は、アメリカのボストン美術館、シカゴ美術館、フランスのギメ博物館など、枚挙にいとまがない。海外ではボストンミュージアムが6万点以上、ヴィクトリア&アルバート博物館（スコットランド分蔵分も含む）では、約43,000点、大英博物館も約2万5000点といわれている。そのため、海外の浮世絵研究は、単に活発であるというだけでなく、膨大な資料を背景に高水準の内容を保っている。しかしながら、日本人による海外資料の調査は、これまでこれら大規模所蔵機関については、膨大な量が壁となり、部分的にしか行なわれてきておらず、全貌は全くつかめていないのが実情である。

なかでも、大英博物館の浮世絵資料は、長きに亙り各時代・各ジャンルの名品を収集してきたもので、すでに日本では形成できない浮世絵の全貌を明らかにするコレクションである。江戸初期から明治期、途切れることなく現在の作品までが集められているところに大きな特徴があり、研究代表者がここ20年来行ってきた、浮世絵ビブリオグラフィを踏まえた正確なカタログングによって、巨大な「画像付き浮世絵事典」・「浮世絵史」が生れると言っても過言ではない。浮世絵研究にとって必須で、研究基盤となる画像を含めた必須情報をインターネット公開し、浮世絵という世界が認める日本文化を代表する研究素材を国際的な研究環境の上に置くことになり、よりグローバルな日本文化研究環境を確立することに繋がるのである。ここをもって、実質上、国際的かつ科学的浮世絵研究基盤が実現するということになる。

3. 研究の方法

2008年度から2011年度の間、夏期、春期に英国大英博物館を訪問し、1週間から2週間の撮影・調査を行なう。浮世絵のデジタル撮影は、一日400コマを超えるペースで行われるが、研究代表者が構築してきたノウハウによって実現できる。デジタル画像化された

浮世絵資料を日本に持帰り、デジタル処理により、WEBサーバー上に登載する。カタログング作業用データベース上で、メタデータと解説データ付与を行なう。

新出資料、難読資料を順次抽出し、既刊の浮世絵図録や研究代表者のプロジェクトが運営している15万枚を超える浮世絵画像データベースと突合せることで詳細な分析を行う。

なお、この作業にあたっては、欧州、米国の所蔵機関への調査が適宜行なう。こうした他機関への調査をも踏まえたデータ入力ならびにデータ確認作業を行い、カタログデータを蓄積していく。

研究成果は、関連学会やジャーナル等においても発表するが、主目的は、大英博物館所蔵浮世絵という、世界の基準となる基本情報データの共有である。全体のカタログ情報は、まず、最初に大英博物館がWEB公開している所蔵資料データベースへの掲載を進めてもらう。大英博物館の公開システムは、日本語も扱えるので、そのまま日本語環境で検索・閲覧が可能となる。その上で、当該プロジェクトが運用している浮世絵専用のWEB公開システムに登載し、許可を貰いながら、申請者の所属研究所アート・リサーチセンターからの公開も行う。

4. 研究成果

全8回の現地調査・撮影により、大英博物館の浮世絵・画帖の全貌についてすべてを把握することができた。以下、そのコレクションの概要について報告する。

(1) 肉筆作品

まず、肉筆作品であるが、今回撮影対象となった一部の卷子とアルバム体裁のものを含むと、2300点にのぼる。別収蔵スペースにある、卷子・掛幅は2000点を数え、また点数未確認の屏風も含めると大凡、5000点に達すると見られる。今回の研究課題では、肉筆作品に重点を置いておらず、未落款の作品も多いこともあり、本報告では、詳細な分類はせず点数の概要に留まる。

(2) 浮世絵版画

浮世絵版画は、総数14,799点が確認できた。本研究課題を遂行中にAuther R. Millerコレクションが2,663点寄贈され、収蔵数が一気に増えた。それ以前は、12,136点であったことが判明し、25000点という予想をかなり下回っていたのである。

摺物（非商業出版）

海外コレクションでは、摺物比率が高い場合が多い。例えば、アイルランドのチェスタ

ーピーティー図書館(CBL)所蔵品では、全 839 点の内、359 枚を数える。しかし、大英博物館の場合は、1,598 点であり、それほど比率は高くない。しかも、CBL 他、特に英語圏の所蔵機関に多い、色紙判摺物については、115 点と極端に少ないことが注目できる。この状況は、もう一つのロンドンの巨大浮世絵コレクションである、ヴィクトリア&アルバート博物館でも同様であり、V&A の場合は、22 点である。一方、大英博物館の摺物の特徴は、色紙判以外にあり、俳諧摺物が 647 点となって、海外コレクションとしては珍しい。なお、この俳諧摺物は、1980 年にまとめて登録されたもので、この時に登録された摺物は、色紙判は含まれず、狂歌摺物などの四条派摺物を含めて 911 点となる。したがって、1980 年以前の大英博物館では、摺物は、V&A と同じように少なかったものようである。なお、この 1980 年登録資料については、未だ全体に互る研究は行われていない。

(版画) 商業出版

この内、書籍から切り離された零葉が 219 枚あり、これを除くと、12,962 枚が一般的な浮世絵版画の実数となる。なお、この枚数は、2 枚続、3 枚続などの作品に場合には、シート単位で数えている。本調査の前段階では、25,000 枚程度になると予想していたが、それをかなり下回る数字となった。大英博物館の収蔵品は、浮世絵史や浮世絵の名品を語る上でのスタンダードとしての役割を果たしてきたため、収蔵量のイメージが膨らんでいったものと考えられる。それだけ、大英博物館の浮世絵は、露出度も高く存在感が大きいと言えるだろう。

【絵師別作品数】

A. 国芳 この内、2009 年に収蔵された Arthur R. Miller Collection は、歌川国芳の作品ばかりを集めたもので、上述のように 2,663 点に上る。本コレクションについては、2008 年度中に調査を実施しており、その調査の成果として、ロンドンの王立美術アカデミーでの大規模な国芳展が開催されるに至ったことは、本研究の一つの成果である。この A. R. Miller コレクションと既収蔵の国芳作品とを合計すると 3209 点となり、ほぼ 25% という高い数字となる。現状では、大英博物館の浮世絵版画は、国芳コレクションによって特徴づけられていると行ってもよい状況となっているのである。

B. 写楽 写楽は、33 点が確認できるが、その内、1 点は無落款のもので、検討が必要であり、32 点となる。登録年代は、明治 39 年(1906)以降であり、オリジナルか否かの再検討の余地がありえることを加えておく。

C. 歌麿 歌麿は、豊章落款の 1 枚を含め 379 枚となる。大首美人画などの代表的な作品が多い。

D. 北斎 春朗落款の 9 枚を含めて、414 枚となった。この内、「富嶽三十六景」は 97 枚あり、状態の優れた物が多く、注目できる。もちろん、これらは、最も頻繁に紹介されている作品であり、世界が認めた作品となっている。また、怪異ものとして著名な「百物語」も全作品の 5 枚を収蔵している。

E. 初期版画 師宣は、収蔵されておらず、清信も春画揃い物の 7 点と紅絵 2 点のみ。丹絵も 4 点と初期版画が極端に少ない。紅絵は 16 点、漆絵は 3 点、紅摺絵は 24 点である。この様に、錦絵以前の作品が思いの外少なかったのは、まったくの予想外であった。

F. 春信 春信は、171 枚であるが、現状では偽落款のものを含めた枚数である。

G. 勝川派 春章が、450 枚、58 枚、155 枚となった。

H. 清長 151 枚。

I. 初代豊国・初代国政・初代国貞・国安 豊国 343 点、国政 12 点となるが、豊国の比率は、比較的 low、国政は、大首の名品が多いことが特徴となる。国貞は、321 点、国安 16 点で、これも予想外に少ない。この歌川派の初期 4 人の作品が少ないことが、あるいはこの絵師たちの浮世絵史上における評価の低さに繋がっている可能性もある。

K. 三代豊国 つまり初代国貞の改名後の作品数であるが、685 枚である。これは浮世絵の総出版点数にして最も作品数の多い絵師である国貞としては、目をみはるほどの少なさである。これも、国貞の評価を下げる原因になっていた可能性がある。

J. 初代広重 国芳の次に多いのが、初代広重で、1545 枚となった。北斎と同様、名所絵の優品が揃っているが、収蔵品数が多いのは、海外の所蔵機関に共通しており、重複作品も極めて多い。

【ジャンル別作品数】

A. 春画 ジャンル別に見ると、2013 年度に予定されている春画展に関わって、春画は 422 点収蔵している。小判春画が多いので、大英博物館だけでは、展覧会を作れないことは明確である。

I. 柱絵・掛物絵 摺物とともに、海外での収蔵数が多い柱絵掛物絵については、紅摺絵の時代も含めて、充実している。柱絵が 177 点、掛物絵が 31 点である。

以下、描かれた内容別ジャンルの作品数について報告する。

あ. 武者絵	2811 枚
い. 名所絵	2687 枚
う. 役者絵	2553 枚
え. 美人画	2190 枚
お. 花鳥画	328 枚
か. 忠臣蔵絵	468 枚

となる。つい最近収集された大規模な国芳の Auther R. Miller コレクションによって、武者絵の比率が非常に高くなっている。一方、役者絵の比率が非常に低く、美人画の比率が高いという特徴が判明した。源氏絵が少ないのも特徴となろう。

大英博物館の収蔵品の状況は、Auther R. Miller コレクションを除外して考えると、現状の浮世絵史の記述の実態ときわめてパラレルな状況であることがわかる。浮世絵史にこのコレクションの収蔵状況が何らかの基準を提供してきた実状が、わかってきた。また、初期版画については、おそらくポストン美術館の収蔵品が基準となっていると予想される。

大英博物館は、レベルの高い専門学芸員が継続的に収集を続けてきた博物館であり、上記に加えて、すでによく知られた絵師や初期作品以外にも目をみはるべき質を有することが判明した。

(3) なお、調査・撮影にあたっては、まず、大英博物館修復部門への撮影方法の説明を行い、ライティング、平面化等の技法について許諾を得た。また、デジタル撮影であるため、IT 部門・写真部門と綿密な打合せを経て、そのコンディションについて、正式に大英博物館のアーカイブ条件に適應させた。本プロジェクトで作成したデジタル画像については、著作権はもちろん放棄し、すべて寄贈という形になる。また、大英博物館の収蔵品管理データベースシステムへの登録については、大英博物館側のプロジェクト学芸員が行ったが、2010 年度から 2012 年度は、本学の PD が、大英博物館側の資金によりプロジェクト学芸員としてセカンドメント型(いわゆる出向型)で採用され、本プロジェクトが若手研究者のキャリア形成に有効に機能した。

大英博物館に寄贈した。大英博物館 WEB サイト・所蔵品閲覧システムに掲載されることになっているが、第 5 回目以降の撮影画像については、上記の人材派遣にも関わらず、大英博物館の人手不足の理由により、登載されていない。本プロジェクトの一つの目標であった所蔵機関が公開する画像へのリンク型 DB は、システム自体完成したが、上記の理由により現在未公開である。本研究課題による研究活動が終了するにあたって、再度大英博物館側への働きかけを行い、全画像の公開が促進されるよう申入れを行っている。この点については、きわめて残念な状況である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

RYO AKAMA, Satirical and Humorous Pictures of Chushingura, "UKIYO-E CARICATURES" (Vienna University), 2011.12, 査読有, pp.41-58

〔学会発表〕(計 4 件)

赤間亮, Digital Revolution: New challenges in the ARC digitization model, EAJRS2011, 2011.9.8, Newcastle University, UK

赤間亮, Trends in studies using digital images; デジタルイメージを使った研究潮流, EAJRS2011, 2011.8.24, Tallinn University, Estonia

Ryo Akama, Donatella Failla, The Digitization of Ukiyo-e at the Chiossone Museum and Some Remarkable Prints in Light of a New Stage in Ukiyo-e Studies, EUROPEAN ASSOCIATION OF JAPANESE RESOURCE SPECIALISTS (EAJRS), 2010.9.2, Museo d'Arte Orientale Edoardo Chiossone, Italy

Ryo Akama, Archiving of Japanese Cultural Heritage in the world, Digital Humanities2010, 2010.7.10, King's College of London University, UK

〔図書〕(計 2 件)

早川聞多, 赤間亮, 他, 「浮世絵入門 恋する春画」, 新潮社, 2011.06, p126(pp.50-55)

赤間亮、富田美香, 「イメージデータベースと日本文化研究」, ナカニシヤ出版, 2010.03, p.276

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

【ホームページ等】

http://www.ameet.jp/digital-archives/digital-archives_20110530/

<http://www.dh-jac.net/db/nishikie/BM/search.htm>

http://www.britishmuseum.org/research/search_the_collection_database.aspx

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤間 亮 (AKAMA RYO)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号: 70212412

(2)研究協力者

Timothy CLARK

大英博物館・日本部門・主任学芸員

Sarah TOMPSON

ボストン美術館・アジア部門・浮世絵担当
学芸員